主日礼拝説教 「群れるな、しかし、群れとなれ」

日本基督教団石神井教会　2018年4月15日

【使徒書日課】ペトロの手紙一　5章1～11節

1さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光
にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。2あなたがたにゆだねら
れている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世
話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい。3ゆだねられている人々
に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい。4そうす
れば、大牧者がお見えになるとき、あなたがたはしぼむことのない栄冠を受けることになり
ます。

5同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜ
なら、

「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる」

からです。

6だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めて
いただけます。7思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを
心にかけていてくださるからです。

8身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子の
ように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。9信仰にしっかり踏みとどまって、
悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに
遭っているのです。それはあなたがたも知っているとおりです。10しかし、あらゆる恵み
の源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてく
ださった神御自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、
揺らぐことがないようにしてくださいます。11力が世々限りなく神にありますように、ア
ーメン。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　10章7～18節

7イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。8わたしより
前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。
9わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草
を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならな
い。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。11わたし
は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を
持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。――狼は羊を奪い、
また追い散らす。――13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。14わたし
は良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それ
は、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊の
ために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも
導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼い
に導かれ、一つの群れになる。17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、
父はわたしを愛してくださる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたし
は自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。
これは、わたしが父から受けた掟である。」

《神の羊の群れ》

皆さんが子どもたちであれば、今日は、「愛する神の小羊たちよ」と呼びかけたいところです。わたしたちは神の羊、主イエスに養われる羊の群れ。神が、わたしたちの真の羊飼いとなってくださった。ただそのことを心に留めるために、今日の聖書日課は定められているのです。ただそのことを覚えるために、今日ご一緒に歌う讃美歌を選びました。そのことに徹するために、今日、本当は、皆さんといつも交読する詩編 51 編ではなく、詩編 23 編を用いたいとも考えていました。

「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない」と始まる詩編 23 編の御言葉を暗誦されている方もあるのではないでしょうか。わたしどもが子どものころまでは、教会学校でも御言葉の暗誦を盛んにさせていました。聖句暗誦はたいてい苦痛なものでしたが、中には子ども心にもぜひ暗誦できるようになりたいと思わせるような御言葉があったことを思い出します。詩編 23 編は、そのような、ぜひ暗誦したいと思わせる御言葉の一つでした。

とても不思議なことです。わたしたちには、羊や羊飼いといったものは、普段まったく触れることのない世界のものです。実のところ、本物の羊を見る機会は限られています。わたしたちのほとんどは、せいぜい観光牧場で囲いの中に飼われている小さな群れを見たことがあるかどうか、なのです。にもかかわらず、わたしたちは、聖書で神と人間の関係が羊飼いと羊にたとえて語られるとき、それを当然のことのように聞き、想像し、自分のものにしてしまっています。

実のところ、本物の羊を知らないからこそ、この羊飼いと羊のたとえを、素朴に受けとめることができるのかもしれません。「こどもさんびか」として歌われてきた「小さいひつじが」という讃美歌（『讃美歌 21』200 番）で歌われているような、少しばかり勝手なことをしてしまうけれども、弱くて、小さくて、本当は羊飼いを頼りにしている、穏やかで従順な羊。わたしたちのイメージしているのは、そのような羊ではないでしょうか。そのような羊の一人として、自分のことをイメージしているのではないでしょうか。

実際の羊はどうなのかと、調べたことがあります。どうも、わたしたちが讃美歌から勝手に想像するほどには、穏やかでも、かわいらしいものでも、ないようです。羊にも、個性があるのです。おとなしい者もいれば、乱暴者もいる。従順なのもいれば、ワガママなのもいる。そのような個性豊かな羊たちを、ひとつの群れとしてまとめ、導く羊飼いの苦労は、並大抵のものではないようです。

先週、新年度の教会役員として選ばれた皆さんの就任式をしました。その際に、今日の使徒書日課（Ｉペト 5 章）をお読みしました。役員の皆さんは、「**神の羊の群れを牧**」するために立てられているのです。教会という群れに加えられた羊。それは、もちろん、皆さんのことです。「小さな羊」とは必ずしも言えない、個性豊かな羊たちの群れ。黙っていても着いてくる従順な羊たちでしょうか。役員の皆さんも、もちろん牧師・伝道師も、羊の一人にすぎないのに、「神の羊の群れを牧するように」とは、少し荷が重すぎるのではないでしょうか。

《良い羊飼い》に導かれる

もちろん、わたしたちの真の羊飼いは神であり、キリストです。わたしたちは皆、牧師・伝道師だろうと、役員だろうと、真の羊飼いに養われ、導かれる羊です。主イエスが「**わたしは良い羊飼い**」と宣言してくださっていて、本当に良かったと思います。旧約の預言者エゼキエルが告げていたように、神に羊飼いとして立てられていた者たちが、その役割を果たしていないとして責任を問われ、厳しく裁かれるのだとしたら、わたしたちは、だれも羊飼いの役割を引き受けたいとは思わないでしょう。羊飼い役は、主イエスにお任せしておきたいのです。

事実、わたしたちは、突き詰めるならば、「良い羊飼い」である主イエス・キリストにこそ導かれて来た者です。見える姿ではありませんが、わたしたちは、主イエス・キリストがご復活くださって、今も生きてお働きくださっていることを、知っています。その主イエスが、わたしたちをそれぞれの場所から呼び集めてくださったので、わたしたちは、教会という不思議な集団、群れに、加えられることになったのです。

自分でキリスト信仰を選び取ったと考える人もいますが、それは究極的には事実ではないでしょう。自分で選び取ったのならば、いつでもそれを自分で捨てることができるということでしょう。しかし、わたしたちは、これを捨てることはできません。ひとたび洗礼を受けた者は、そのしるしを永遠に取り除くことはできません。主の日ごとに、欠かさずとは言えないとしても、わたしたちは、主イエスに呼び集められて、一つ所に集うように導かれてきたのです。主イエスが最後の晩餐を共にした弟子たちを前に「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ 15:16）とお告げになられたことは、真実なのです。

今日の福音書で、主イエスは、「**わたしは良い羊飼い**」とお告げになられる前に、「**わたしは羊の門**」とお告げになられていました。うっかりすると聞き流してしまいそうな言葉ですが、これも確かに主イエスがお語りになられたことです。

「羊の門」は、羊の群れが一つ所に集められる囲いの出入り口として設けられた門のことです。この門を通って囲いに入るならば、羊は、安全、安心を得るのです。世の中には、さまざまな囲いがあります。集団があります。その門を入ってよいのかどうか、中に入ってみるまで判断がつかないような場合もあります。下手をすると、中に入っても、その実態が隠されていて、食い物にされてしまう場合だって無きにしも非ず、でしょう。しかし、主イエスがお集めになられる囲いは、そうではない、というのです。その入り口からして主イエス・キリストを表看板にしているのです。主イエスの弟子の群れ、教会は、そういうところだ、というのです。

今日もここにおいでの皆さんは、そのような「羊の門」を通っておいでになられたはずです。主イエスが、皆さんを、それぞれの場所から呼び集められたのです。見えないお姿のキリストの、耳には聞こえないかもしれない呼び声に導かれて、わたしたちは、今日も、ここに共にいるようにされているのでしょう。

《一人の羊飼い》の声を聞き分けて

主イエスとお会いするために集まっている日曜日の教会においでの皆さんは、そのような「羊の門」である主イエスを、すでにご存じでのはずです。自分をこの集まりに導き入れた方、ここに至る入り口を開いてくださった方が、主イエス・キリストであることを、お認めいただけるはずです。

すでに洗礼を受けたわたしたちは、もちろん、そのことを知っています。洗礼を受けに至ったのは、わたしたちの入るべき入り口として主イエスご自身がいらっしゃることを認めたからでした。洗礼によって、わたしたちには、「羊の門」としての主イエスがはっきりとしるしづけられたのです。

けれども、まだ洗礼を受けていない方であっても、今ここにいらっしゃる皆さんは、間違いなく、すでに「羊の門」である主イエスを通って、ここにおいでになられたのです。そのことを、まだお認めになられていないとしても、まだ気づいていないとしても、主イエスの御名のもとに集められた群れの教会に導き入れられた人は皆、ほかのどんな門でもなく、主イエス・キリストという「羊の門」を通って、導き入れられてきたのです。

そのことにお気づきになられていないとしても、そのことを積極的にお認めになられないとしても、「羊の門」の中に入って来てくださった皆さんを、わたしたちは歓迎します。礼拝後には、コーヒータイムにお迎えできるでしょう。しかし、ここでは何よりも、耳を澄ませていただきたいのです。わたしたちはここで、何よりも、皆が、ただ一人の羊飼い、主イエス・キリストの御声を聞き分けるようになることを願っているからです。

羊は羊飼いの声を聞き分ける、と主イエスは繰り返し言われました。羊飼いの声を聞き分けられるようになるかどうかは、羊にとって生死を左右することなのです。たとえ暴れ羊でも、ワガママ羊でも、羊飼いの声を聞き続けている限りは、命を失うことはないでしょう。けれども、自分の声を大きくしていたのでは、聞き分けるべき御声を聞き損ねてしまうかもしれません。他の者の発する大きな声に耳を傾けすぎては、御声を聞き分けられなくなってしまうかもしれません。

不思議なことに、たとえ大きな騒音がするような場所であっても、わたしたちの耳は、本当に聞き取りたい人の声を聞き分けることができるものです。わたしたちが、ひとたび主イエスの御声を知るようになり、その御声の発するほうに耳をそばだてるならば、どのようなところでも、わたしたちは、主の御声を聞き分けることができるはずなのです。

もちろん、そもそもの主の御声を知っていなければ、聞き分けられないでしょう。その純粋な御声を、わたしたちは、羊の門を入った囲いの中、教会の営みの中で、聞かせていただこうとしているのです。ここでは、わたしたちは、自分自身の声を発しないのです。主の御声だけを聞き、その御声の響きだけを、この唇に乗せて響かせるのです。ただ主の御声だけに導かれる群れとなるのです。わたしたちの誰かの声にかき集められる群れではなく、主の御声に導かれる群れになる。そこに加えられるために、わたしたちは呼び集められてきたのです。